

1 -2 日本語初期指導 ラウンドテーブル 実践報告を受けて

大蔵守久

【1】 私たちを困らせる3つの「ない」

| | ①金ない | ②暇ない | ③分らない |
|------------|-----------|-----------|---------|
| ヒト (人手・人材) | 採用 | 受け入れ | 未経験者の担当 |
| モノ (教材・教室) | 教材購入・教室確保 | 教材研究 | 教材作成 |
| コト (情報・研修) | 教材情報・研修情報 | 情報収集・研修時間 | 情報入手先 |

【2】 応急対策

- ①ヒト→学校・地域・大学等の連携/民間支援者の協力
- ②モノ→無料ダウンロード教材の活用/文科省サイト「かすたねっと」で教材検索/研修への参加
- ③コト→子日研での情報収集・情報交換/「こどもメール」で情報収集

【3】 恒久対策

- ①子日研の参加者の拡大と多様化→文科省・県市等への働きかけ
- ②「かすたねっと」の情報整理 (分類科目の整理)
- ③各地の研修情報一覧/研修の相互開催

【4】 本日の課題への一提案 (本資料は事前に作成しているため、妥当性に欠くかもしれません。ご容赦ください。)

(1) プレクラス方式

①プレクラス終了後、在籍校に通えない子

*波多野でもいた。編入前になると、わざと日本語テストの成績を悪くしたり、日本語が分からないふりをしたりする子が。

⇒退級しても大丈夫だと思われる※場合は、可哀想だが「退路を断つ」ことも必要。

無理だと思われる場合は、在籍延長の措置はとれないか。

*在籍延長すると、1クラスの人数が増えて対応が不十分になることも。

⇒新入生を優先して教えることで、当該児童生徒に不満感を持たせる。

退級しても大丈夫な子であれば、不満感・寂しさから編入に心が向くのでは。

※本来、「退級しても大丈夫な子」はいませんので、「やむなく編入させる子」という意味です。

*複式学級での指導の工夫

⇒最大「3グループ分け」が限度

進度が一番進んでいるグループをA

次に進んでいるグループをB

遅いグループをCとすると、

波多野では右表のようなローテーションで

おこなった。

会話指導で扱った内容をそのままプリントにして

次の時間に「文法自習」で復習を。

分からない個所は他の子の指導をしながら

手が取られない範囲で対応する。

低学年になると自習が難しいので、1時間の中で15分ずつ3回繰り返した。

| | A | B | C |
|---|----------|----------|----------|
| 1 | 文字 自習 | 文字 自習 | 会話 指導 |
| 2 | 文法 自習 | 会話 指導 | 文法 自習 |
| 3 | 会話 指導 | 文法 自習 | 文字 自習 |
| 4 | 算数 数学 | 算数 数学 | 算数 数学 |

②校内での情報共有が不十分・在籍校内でのコンセンサス

多くの学校が抱える悩み。情報共有ができていない学校の共通点は「校長の理解」があること。
ここは参加者から意見を伺いたいところ。

③見通しをもった指導計画

児童生徒一人ひとりで大きく違うので、指導計画の基本パターンを作るのが難しい。
しかし、基本的な計画がないと、一から作らなくては行けないので負担が大きい。
そこで、今までの経験で数パターンの指導計画に分けられないか。

↓

指導計画の性質を見直してはどうか。

指導計画はあくまでも「予定」。その通りにいかななくても、原因の分析はすべきだが、「見通しが立たない」と苦しむ必要はないのではないか。

実際には、与えられた時間・児童生徒の力などで立てた見通しは変わってくる。

*「特別の教育課程」策定時の裏話…

(2) 通級方式

①通級時は在籍校の教科授業に参加できない

不在時の学習をどのように補うかの問題

- a. やむを得ないと諦める。
- b. 在籍校で補習してもらう。
- c. 通級クラスで補習する。
- d. 母語教室で補習する。
- e. その他の教室で補習する。

選択肢はこの5つしかないのではないか

そう考えたうえで、c. 通級クラスでの補習と、e. その他の教室での補習の方法について提案後記。

②通級者の増加で対応が追い付かない

根本的な対策がとられない限り、応急対策としては以下の方法しかないのではないか。

- a. 新しい子を待たせる。
- b. 在籍生を早めに出す。
- c. 受け入れて「複式学級」で、やれるところまでやる。
- d. 予算がつかないのであればボランティアの力に頼る。

③教科学習支援の必要性が理解されない

理解しない(できない)管理職や教員の根っこにある考え方

- a. 話せるようになったのだから、それ以上は本人の努力しだい。
- b. 日本の子どもだって手がかかる子が多いのだから、そこまでは手をかけられない。
- c. 予算がない。人手がない。だから無理。

理解促進のために

- a. 文科省の『外国人児童生徒受入の手引き』を見せる。
- b. 他地域の取り組みを紹介する。
- c. 少子高齢社会で、将来の生活保護受給者を増やして良いのかという観点で話す。(無理かも)

当面の対策として

- a. ユニバーサルデザインを主張する教員に「異言語に対応できる」こともユニバーサルであることを伝えていく。
- b. 賛否両論あるが、「特別支援」の枠を利用している学校も。

④センター校の加配と在籍校で日本語指導ができる人的体制の整備

*これは予算の問題もあるのでここでは触れないが、「学外の協力」を得るとするのが応急対策としては現実ではないか。

*校務分掌で日本語部会を設けることは難しいが、国語部会に日本語部門を担当させ、授業中にどのような配慮をすればよいかなどの課題を与えることはできないか。

⑤複式学級なので教科指導との丁寧な連携が難しい

*個別指導のような丁寧さが出せないのは仕方がない。

*そのうえで、教材や教え方の工夫でどこまで「丁寧さ」を出せるか。

a. リライト教材の充実⇒国語より算数・数学・理科・社会を

専科ではないからこそ作れるリライト教材もある。

特に中学の専科は文型を簡単にしただけでは易しくならない。

(例)「種子植物は胚珠が子房の中にあるかどうかで被子植物と～」

b. 日本語読解指導の中で教科内容を取り込む方法も(ワークショップでご紹介)

c. 読解教材にして、当学年は授業内容との関連づけ、上学年は先行知識の補充に使えば、複数の学年を同時に指導できる。

(例) 小2の分数 等しい大きさに2つに分ける。一つ分はもとの大きさの $\frac{1}{2}$ という。

該当学年の児童には、該当学年の内容そのものを教えることになり、

上学年の児童には分数を学ぶ上での先行知識の確認として扱う。

日本語指導としては、両者共通の課題として扱う。

[]に 分ける。もとの大きさ などの言い方を学ぶ素材

d. 漢字圏と非漢字圏の子どもが混在するクラスでの一斉指導。教材は「ひらがな」で。

⇒漢字圏の子は漢字を見ればだいたい分かってしまう(理解したのとは違う)ので、

日本語の読みを覚えたい、内容を深く理解しようとしなないことがある。

ひらがなで書かれていると、文をしっかりと読み取らなければならない、文法の学習にもなる。また、非漢字圏の子ともペースも合わせられる。

手間がかかるが、指導が終わったところで漢字圏の子どもには漢字かな交じりの文を与え、次回までに読みの練習をしてるように伝える。

⑥中学生に適した教材開発の必要性

*見た目に明らかに幼稚な教材は使わない。⇒プライドと学習意欲

*成人用のテキストでは、学び方は合っても話題が合わない。⇒手直しが必要

↓

*しかし、多くの年少者用テキストが「文法・文型」学習をベースとした作りになっているので、話題とイラストを差し替えれば中学生用に直せるのではないか。

⇒各都府県の教材を中学生向けに編集し直すことは無理か。

既存の市販テキストで試みるか。

市販のテキストをコピーし放題で使われていると、出版社が二の足を踏むということも多少考えておかないといけない。